

しそばをまく時、路次にて水汲にあひても、其實のりよからずと、野俗云なはせり、ことの外水濕を忌とぞるべし、又山畠燒野などに蒔事あり、山中などは夏土用の中にも早く蒔べし、遅ければ風霜にあひて損する事あり、かならず一日も早く蒔べし、燒野に蒔には、なたねを入子まきに玄たるがよきものなり、そばはあくけの有物にて、草の根是にあひて痛かれ、土も和らぐゆへ、春になりて蕪菜さかへ實り多し跡の地和らぎて、あら地もこなしよく、彼是利分多し。

〔王氏農書_{穀譜集}〕蕪麥

蕪麥、赤莖烏粒、種之則易爲工力、收之則不妨農時、晚熟故也、農桑輯要云、凡蕪麥五月耕地經二十五日、草爛得轉、并種耕三遍、立秋前後皆十日內種之、待霜降收刈、恐其子粒焦落、乃用推鎌穫之、見農器圖譜北方山後諸郡多種、治去皮殼、磨而爲麪、焦作煎餅、配蒜而食、或作湯餅、謂之河漏、滑細如粉、亞於麪麥、風俗所尚、供爲常食、然中土南方農家亦種、但晚收磨食搜作餅餌、以補麪食飽而有力、實農家居冬之日饌也、

〔地方凡例錄〕田畠名目之事

一燒畠と云は、里方にはなし、山中には、信州杯は多し、上州榛名山赤城山杯の様成所、畠地には無之、山の片岨の小柴萱草立候處を、小柴萱草共焼て、一雨請灰の濕りたる所、江、蕪麥粟稗等を蒔付、養も不致、灰計に而生立たる作物故、實入不宜、○中、蕪麥計は燒畠之分極上也、夫故信州上州山中蕪麥格別宜、勿論年々一ヶ所に作付難成、當年仕付たる所來年は萱草生立次第に致置、外の所を燒畠にして作物仕付、右の萱草立生たる場所の草立の様子に隨ひ、翌春翌々春燒畠にいたし、一年二年替りに作付致故切替畠と云、

〔成形圖說十五〕曾婆_{中略}○

田家の常言に、麥と蕪麥と嘗相諍、麥曰、吾は疊八枚を蒙とも猶生抜べし、蕪麥曰、吾は三角の稜が